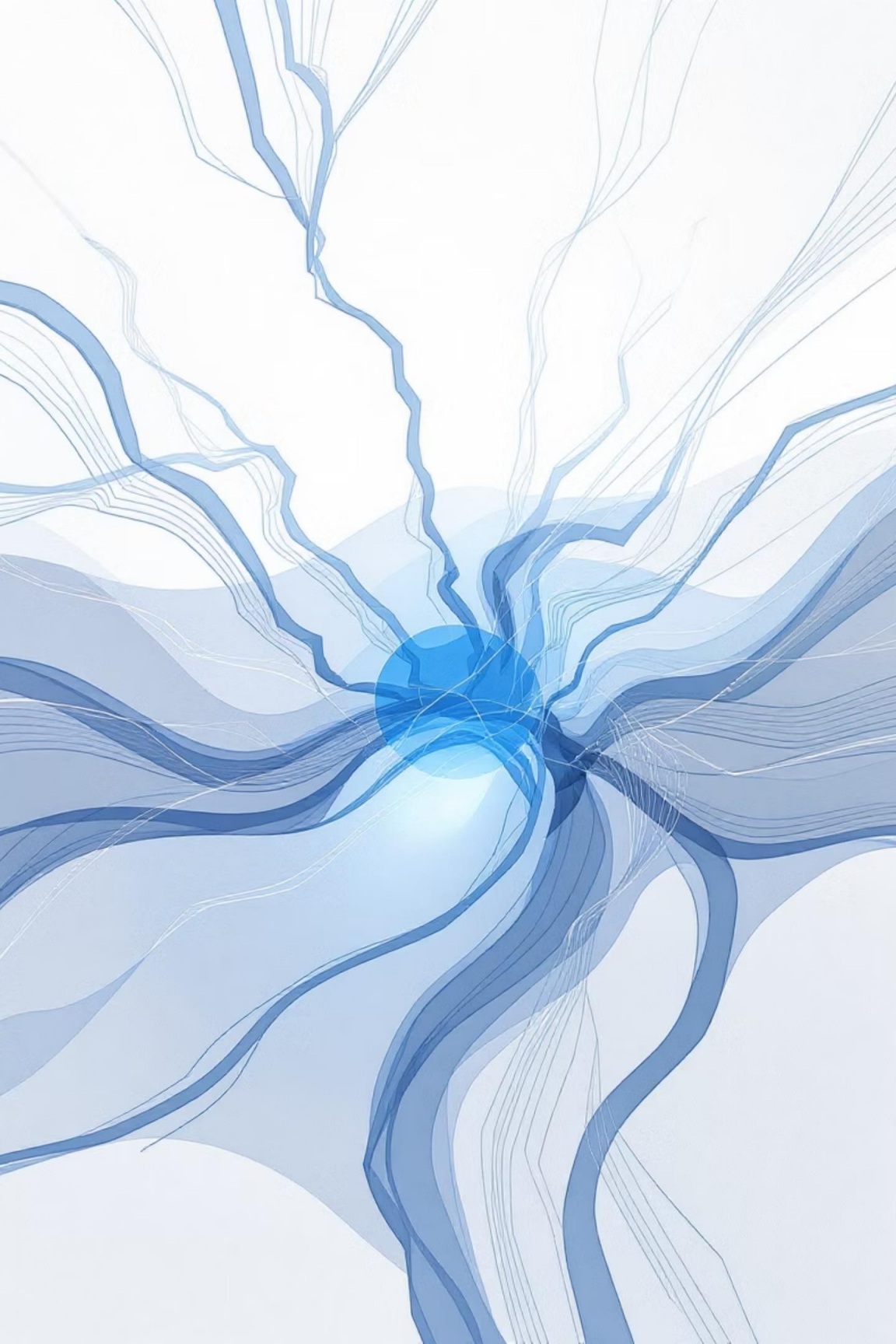




生成AI、こう使った！ 最新導入事例と実践テクニック

株式会社HBA イノベーション推進室

登壇者：岩崎 幸信

2025年10月29日



本日のアジェンダ

01

生成AIの進化と最新動向

対話型から自律エージェントへの発展、2025年の最新トレンドを解説

02

基礎知識と安全な使い方

仕組み、特徴、誤回答対策など

03

日本の導入状況

個人・企業・自治体における利用実態と期待効果

04

実践テクニックと事例

効果的な質問方法、弊社事例

自己紹介



岩崎 幸信

株式会社HBA

イノベーション推進室 パブリックタスクグループ

業務経歴

2018年

自治体におけるソリューションとして
RPAなどを利用した業務効率化や
コンサルティングに従事、
機械学習を用いたAIの企画提案

2020年

RPA、IoT、AIチャットボットなど最新技術
を使った企画提案、営業活動を展開

2024年

生成AIを中心にしたソリューションの
企画提案、研究開発を担当

生成AIの急速な進化により、2025年のビジネスは根本的な転換点に

5年前の常識は今も正解ですか？
今日、何をやめて何をAIに任せますか？



01

生成AIの進化と最新動向

生成AIの進化 ～対話から自律エージェントへ



2020年頃まで 特化型AI

囲碁や将棋、画像解析など



2022年～ 自然な対話

質問や命令に対する回答を生成、基本的な対話型インターフェース



2024年 情報を検索し根拠とともに生成する手法（RAG）が普及し始める

データを活用した高精度な回答、社内文書や専門知識との統合



2025年 エージェント型AI

MCP、A2Aの登場。自律的に動作し外部ツールなどを利用してタスクを完遂



近未来 マルチエージェント型

複数のAIが役割分担し協力しながらタスクや問題を解決

2025年の最新AI動向

1.	 ChatGPT
2.	 Gemini
3.	 deepseek
4.	 Grok
5.	character.ai
6.	 perplexity
7.	 Claude
8.	 JanitorAI
9.	Quark
10.	 Google AI Studio

- 今年8月、OpenAIがGPT-5（ChatGPT）を発表
- Google、Anthropic他各社も高性能モデルを相次ぎ投入
- 世界的なトレンドとしては、依然としてChatGPTが優勢



市場シェア:

ChatGPTは全世界の生成AI利用者の約60%を占め、圧倒的なリードを維持

政府の動き

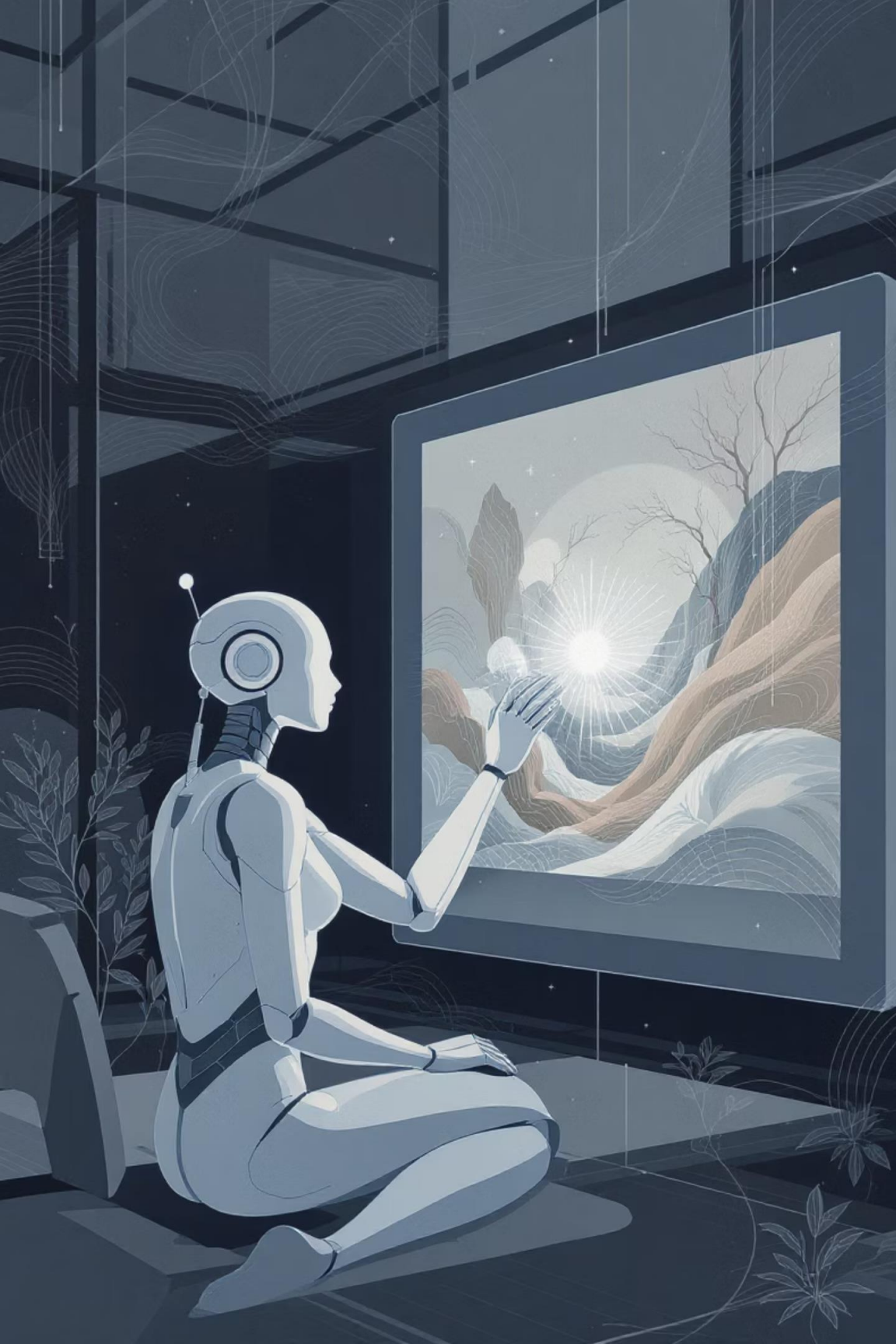
- 5月末デジ庁「行政の進化と革新のための生成AIの調達・利活用に係るガイドライン」策定

出展：米ベンチャーキャピタルAndreessen Horowitz

「The Top 50 GenAI Mobile Apps, by Monthly Active Users (2025.8.27)」より一部抜粋

02

基礎知識と安全な使い方



生成AIとは何か



基本定義

人の話す言葉や参照資料にもとづいて
文章・画像・音声などを生成する仕組み



従来AIとの違い

「新しいコンテンツを作り出す」ことに特化



適用範囲

文章作成、プログラムコード生成、画像や動画生成など多岐にわたる
従来の特化型AIに比べ色々なことができるようになった（マルチモーダル）

専門家でなくても誰でも使える共通ツールとなった

生成AIの仕組み

次に来る言葉を予測

生成AIは次に来る言葉を確率的に選んで文章を組み立てる仕組み
→確率的言語生成

 Chat

no 1 | 10/8 9:13

次に来る文章を1つ予測してみて

昔々

gpt-5 | context 20 | cost 1.253

あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

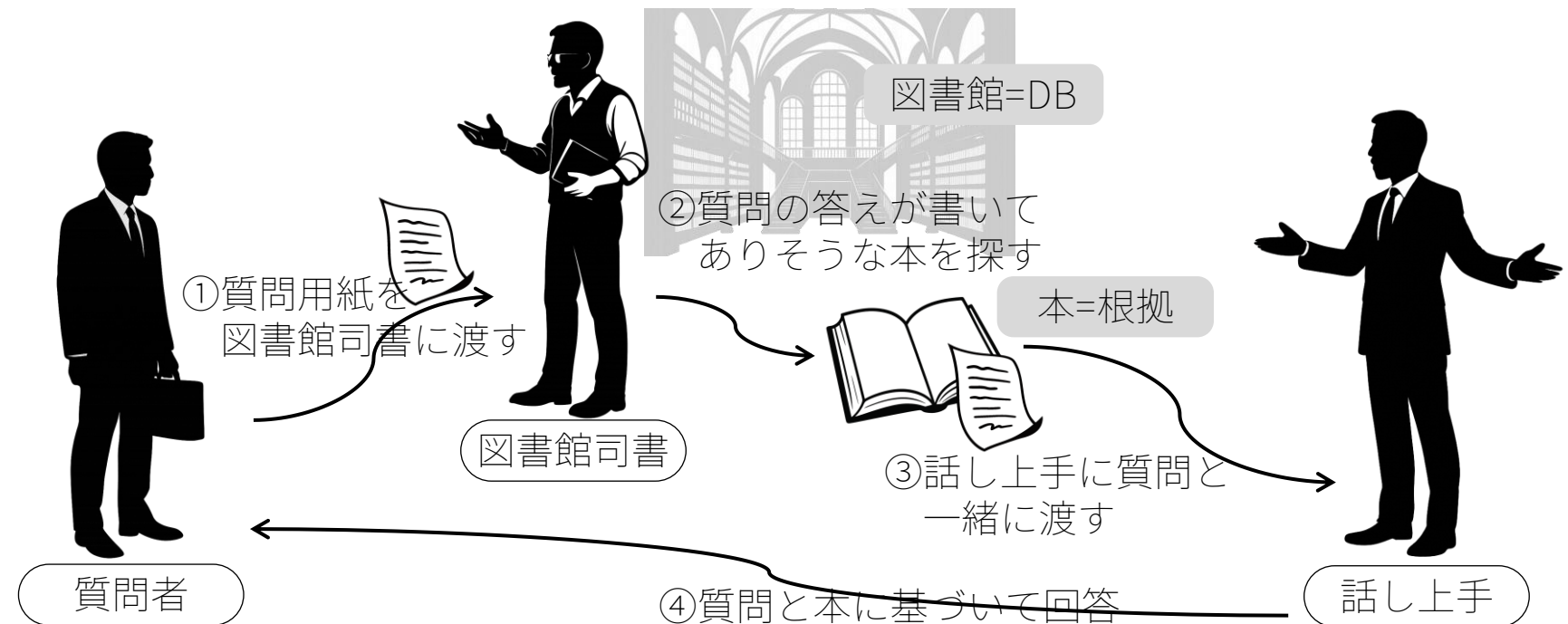
この確率的生成の性質上、情報が不足・曖昧だと
もっともらしいけれど誤っている文章が生成されてしまう

誤生成を防ぐ

生成AIは情報が曖昧だと誤った内容を補完することがある（ハルシネーション）

防ぐ工夫：

- 対策として、根拠提示を促したり、「わからない場合はわからないと回答して」と明示するなど、適切な指示を活用することが重要です
- 更に、この問題を解決する効果的な方法の一つに、**RAG（検索拡張生成）**があります
- RAGは、外部の資料を検索し、その内容を引用することで生成の正確性を高めます



安全に使うための3つの方法

1. 取扱方針の明確化

- 機微な情報は入力しない（個人情報、機密情報）
- 社内ルールを明文化し周知
- 国のガイドラインに準拠

2. 段階的な検証

- まず公開情報やテストデータで試す
- 小規模パイロット運用から開始
- 結果を検証してから本格展開

3. 適切な実行環境

- 現行サービスの多くはクラウド型
- 個人情報や機密情報（自治体機密性3など）を取り扱う場合はオンプレ型の生成AI、ローカルLLMを推奨

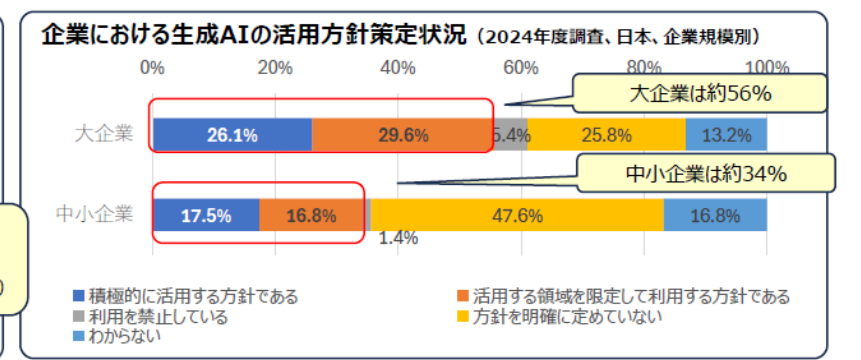
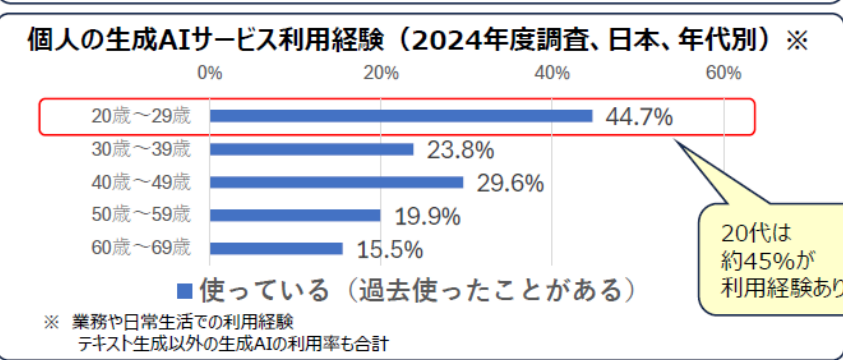
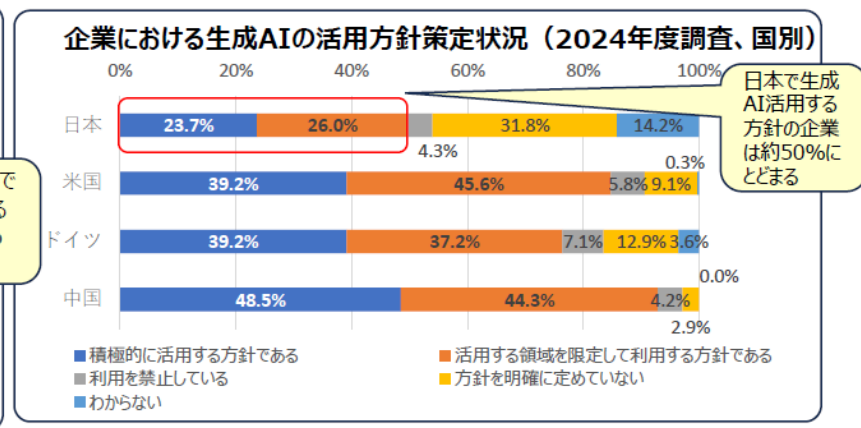
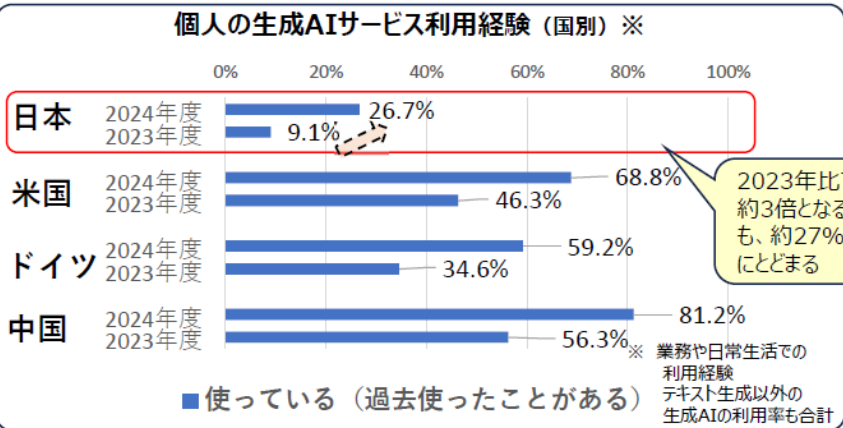


**オンプレ型の生成AI(ローカルLLM)、展示会場にございます
是非、ご覧になってみてください！**

03

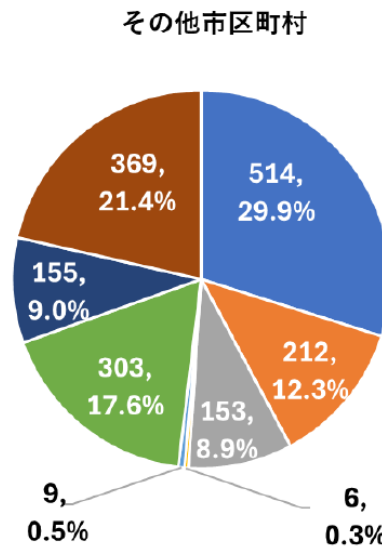
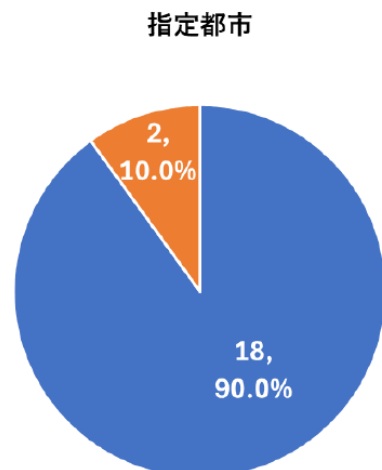
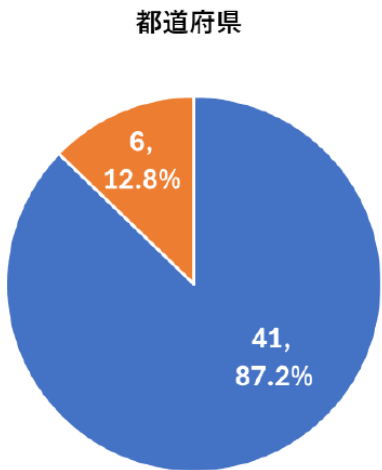
日本の導入状況

日本における生成AI活用状況



- 個人利用は26.7%、企業活用は約50%にとどまる
- 自治体では都道府県、指定都市ではほぼ100%
- 市区町村でも導入が進行中

→とはいえ、全ての職員・社員が活用できているわけではない
「誰もが安全に・日常業務で自然に使える」環境を整えることが、最大の課題

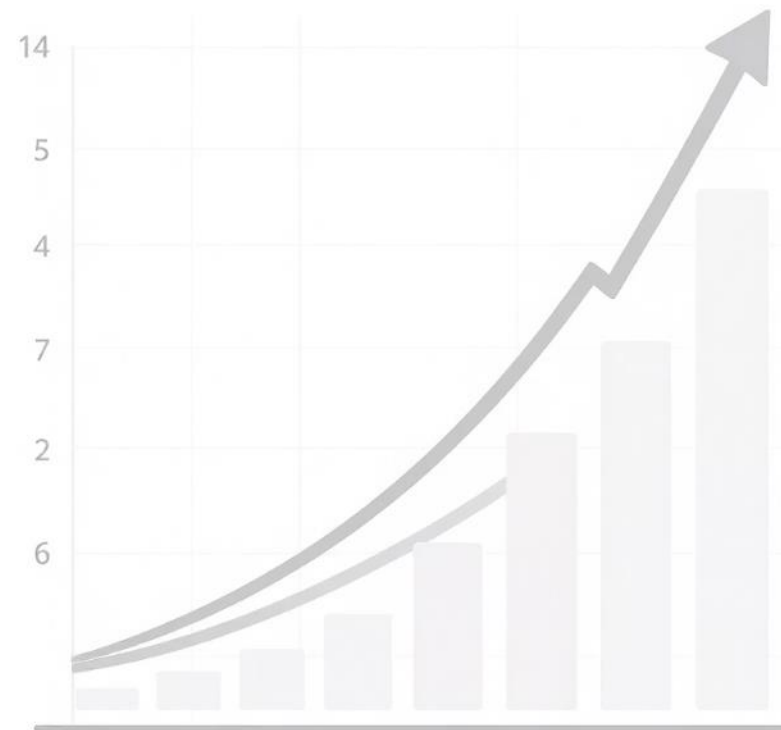


生成AI導入済の企業様・自治体様、 どれだけの社員、職員が使っていますか？

生成AIへの期待 ～桁違いの生産性向上

一般的なIT vs 生成AI

一般的なIT導入は“**数倍**”の生産性向上で大成功。一方、生成AIは業務によっては数十倍など“**桁違い**”の短縮も実現できる。



実際の導入効果

P社の事例

社内業務を自動化。1業務あたり平均で約30分短縮、年間44.8万時間(約2,800人月)を削減

H社の事例

社内利用率を約85%まで引き上げ、業務にかかる時間を約60%短縮

ポイント：利用率を上げること
先ずは使ってみましょう！

04

実践テクニックと事例

上手な聞き方（初級編）～質問の基本

生成AIに投げかける質問や命令 = プロンプト

他人への質問と同じように伝える

1

目的を明確にする

何のために回答が必要か、背景や文脈を説明する

2

回答条件を指定する

含めるべき要素、避けるべき内容を明示する

3

出力形式を決める

箇条書き、表形式、段落など、求める形式を指定する

プロンプト例

目的: 既存顧客の継続率向上について、新規プロジェクト提案の素案を作成すること

条件: 目標数字1つと主要リスク1つを必ず入れること

出力形式: 箇条書き

上手な聞き方（中級編）～より高度なテクニック

根拠・出典の確認

回答の信頼性を高めるために、情報源の提示を求めます

□ プロンプト例：

「情報の根拠となるデータを提示してください」

「出典を明記し、可能であればURLを記載してください」

「事実に基づいて回答してください」

回答例の提示

よりの確な回答を得るために、自身の意図を明確にする具体例やお手本を示します

□ プロンプト例：

「以下のような形式で回答してください：

【プロジェクト名】xxxx

【目標】xxxx」

多様な視点からのアイデア出し

固定観念にとらわれず、クリエイティブな発想や異なる角度からの提案を促します

□ プロンプト例：

「新しいマーケティング戦略を3つ、水平思考で提案してください」

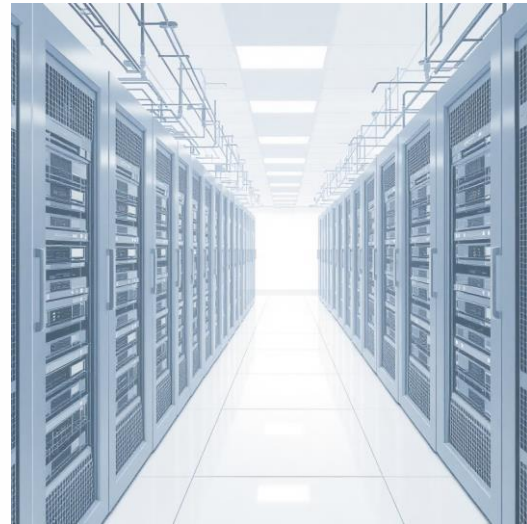
論理的な意思決定の支援

複雑な問題に対し、段階的な思考プロセスや論理的な分析を要求し、意思決定をサポートします

□ プロンプト例：

「ステップバイステップで考えて、それぞれのメリット・デメリットを分析してください」

事例紹介：インフラ監視システム



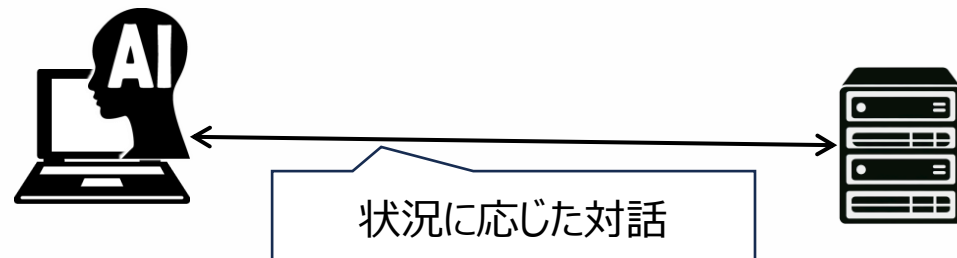
経験の浅い職員でも運用できる、AI自動調査と安全なコマンド連携

課題

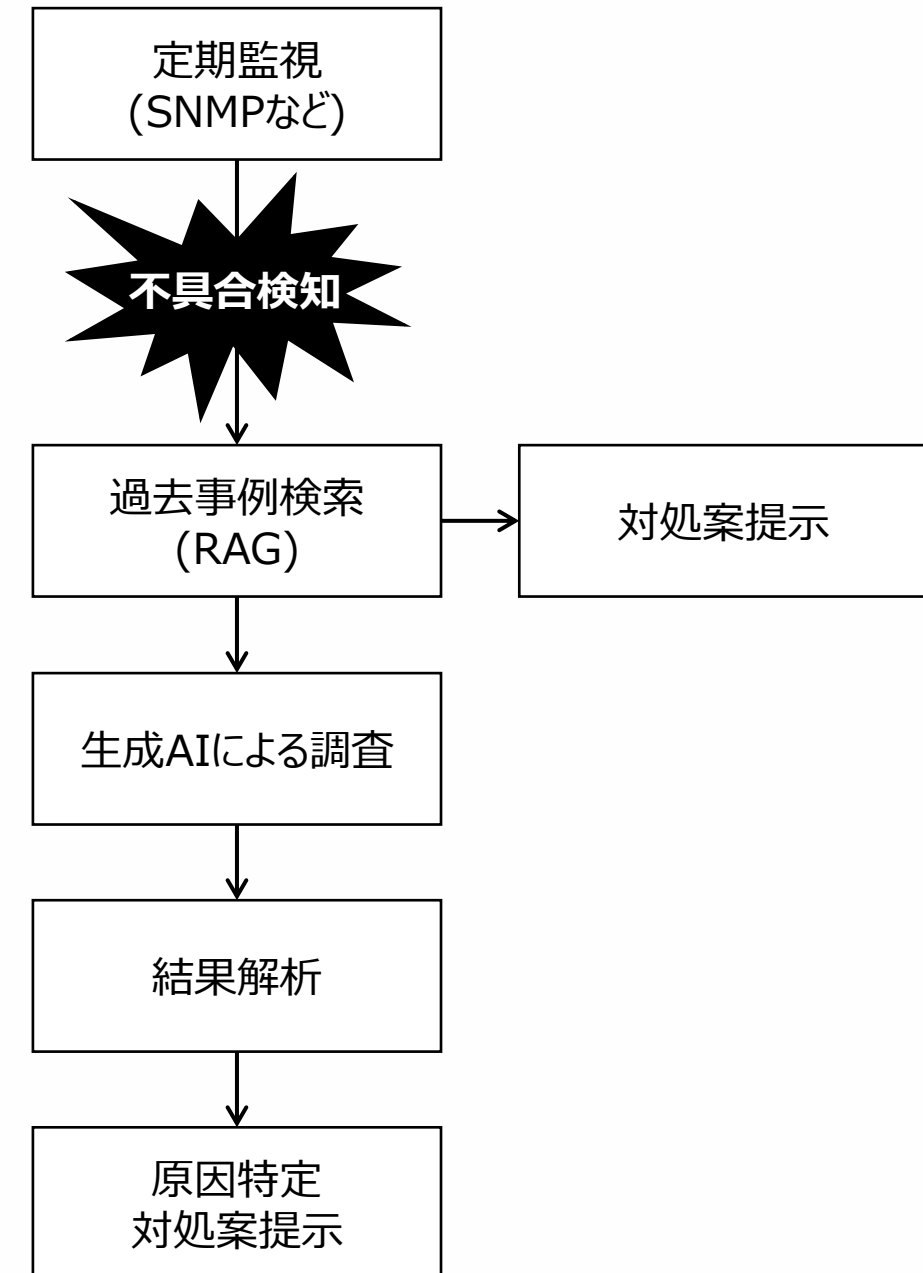
- 経験の差による対応のばらつき
- 24時間監視の負荷
- 過去の知見が属人化している

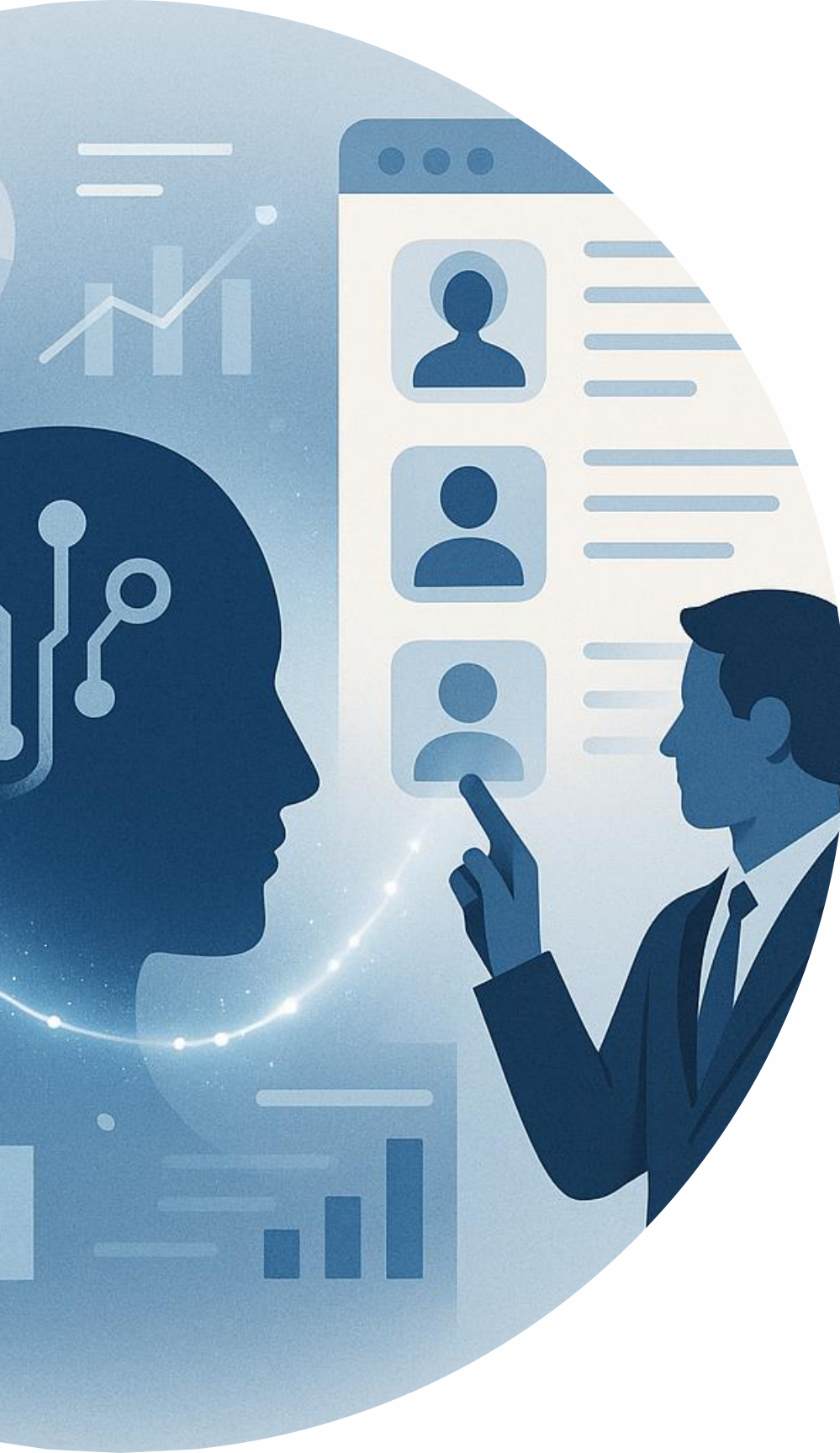
ソリューション

- 経験の浅い職員でも対応可能、24時間の自動監視と分かりやすい対処案で迷わない運用を実現
- 生成AIが状況を判断し自動で障害調査、過去の障害情報（RAG）と一般知識を組み合わせ、原因特定と対応方法を段階的に提示
- SSLによる通信で、OSや機器を問わずログや設定などの確認を自動実行



フロー





事例：人事業務の選考支援

課題

- 異動、配置など膨大な時間がかかる
- 担当者の経験や主観に左右されやすい

概要

- AIで過去の人事実績から各ポストへの配属傾向を分析
- 職員の経歴、評価、本人の目標をもとに異動案を作成
- 生成AIは各ポストへの「適性スコア」とその根拠を提示し、ランキング表示
→人の判断を支援

最終決定は人事担当職員が行い、
負担軽減と公平性向上を両立

事例：北海道新聞社様との協業

概要

- 北海道新聞社様とHBAが共同でAIサービスを開発
- 膨大な記事データベース × 生成AI技術の融合
- 正確性と利便性を両立した情報検索・活用システム

協業内容

- AI研究・開発で培った技術ノウハウを提供
- RAG技術による高精度な情報検索機能
- 新聞社様独自のニーズに合わせたカスタマイズ

北海道新聞社

[ご購入](#) | [広告ご案内](#) | [採用情報](#) | [お問い合わせ](#) | [english](#)

[会社概要](#) ▾ [社会貢献](#) ▾ [教育関連事業](#) ▾ [見学のご案内](#) ▾ [グループ企業・団体](#) ▾

[HOME](#) > [お知らせ](#) > 自治体向け生成AIサービス提供

自治体向け生成AIサービス提供

2025.09.17

北海道新聞社（本社：札幌市中央区、代表取締役社長：堀井友二）は、北海道新聞の記事データを活用した「自治体向け生成AIサービス」の提供を開始します。自治体職員の負担軽減につながる幅広い機能を備えており、人口減少に伴う地域課題の解決に貢献します。システムはHBA（札幌）が開発。10月中旬以降、道内の希望自治体にテスト版を提供し、来年4月から正式に有料サービスを開始します。各自治体が保有する行政資料や内部文書などを事前登録することで、自治体特有の制度や課題、過去の事例などを反映した文書の生成も可能です。

国の生成AI導入に関する指針を踏まえた運用方針を採用する予定で、情報の機密性の確保に十分配慮した安全な利用環境を提供します。

出典：北海道新聞社様公式HPより

一緒に新しい価値を創りませんか？
協業のご相談、いつでもお待ちしております

まとめ



生成AIの効果は桁違い

業務効率効果は従来ITの"数倍"ではなく"桁違い"
早期導入で競争優位性を確保



弱点を理解し対策

ハルシネーションと情報管理がリスク
出典提示やRAGの利用で抑える



聞き方のコツを押さえる

目的、条件、出力形式を明示
段階的に高度なテクニックを習得

先ずは使って、 利用率拡大を目指しましょう！

生成AIを使ったソリューション、弊社や他社様の製品沢山ございますので、
ご興味ある方は是非、展示会もご覧になっていってください！